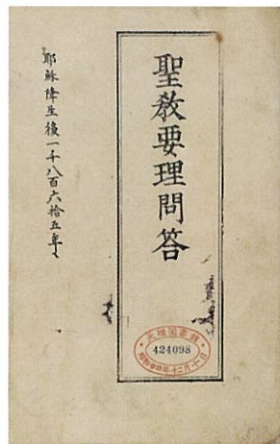




幕末の慶応元（一八六五）年から明治十六（一八八三）年までの十八年間にプティジャン版と称される六十種ほどの出版物が刊行された。プティジャン版の名称の由来は、一八六二年に横浜に來日したフランス人宣教師ベルナル・タデー・プティジャン（一八二九〜一八八四）の名前から来ている。出版のきっかけは、一八六五年三月十七日にプティジャン神父が長崎の大浦天主堂で浦上の「昔のきりしたんの子孫」との感動的な出会いをしたことによる。彼が日本教区長ジラルルに出した三月十八日付書簡に、前日の十二時半頃、男女小児十数名が大浦天

主堂の扉の前に立っていたので中に入れると、一人の婦人がそばに来て「ここにおります私たちの心は皆貴方さまの心と同じでございます」と語り始めた、その時の様子を報告している。

プティジャン版は、キリスト教の布教と隠れきりしたんを指導し再教育するために作られた教理書で、本書は最初の出版物である。中国のカトリック教会が使用していた中国語の教理書を邦訳し、天地創造、原罪、教理の要約と、宗徒の信経、祈祷の事、天主十戒の事、七秘蹟の四条を師弟の問答形式で著述している。本の作りは、墨書した



原稿を版下にした五十三丁の整版本で、きりしたん禁教下で日本人の協力を得て作られたことは明らかであり、文書布教の胆力を感じる。

今年、明治百五十年の記念の年に当たる。この時代の來日西洋人やキリスト教の日本布教に関する出版物も注目されることであろう。

（天理図書館 神崎順一）